
テレビ君

クレーン ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テレビ君

【Zコード】

N7184M

【作者名】

クレーン ケン

【あらすじ】

テレビ君という次世代のロボットが開発発売された。テレビ君は子供達の間でとても人気者になった。

通称「テレビ君」という新型ロボットが開発、発売されると世界中で話題になり何百万台も売れた。

「テレビ君」は次世代の新型ロボットで、勿論テレビも見る事も出来れば、ゲームもでき、インターネットにも繋がるし、なにより人間の言ひ事をよく聞くロボットだった。

大人にも人気のあるロボットだったが、特に子供に人気のあるロボットだった。

大人達は仕事で忙しかったので、テレビ君は子供の子守り代わりにとても重宝されたのだ。

テレビ君は子供の言う事を聞くようにプログラムされていて、大人は安心をして子供を家に残し外で仕事をする事が出来たのだった。

「ねえ、テレビ君、とても退屈だよ」と子供が言うとテレビ君は

「ほっちゃん、じゃあこんな番組はどうですか?」と言い、子供の好きなテレビ番組を子供に見せるのだった。

特に兄弟の居ない一人っ子の子供はテレビ君をとても大事にした。

「ねえ、ゲームをしようよ」と子供が言うと、テレビ君は子供相手に人気のテレビゲームをして遊んであげるのだった。

なにしろ、テレビ君は人間のように疲れというの知らず、電源さえあればいつまでも子供の相手が出来るのだ。

子供は次第に外で遊ばなくなり、家の中でテレビ君と遊ぶようになった。

数年経ち、次世代のテレビ君が開発、発売された。

新型のテレビ君は料理をする事も出来た。
データさえあれば、子供が好きな料理をなんでも作る事が出来たのだ。

次第に母親は家で料理をしなくなつた。

世界中で新型のテレビ君は売れ、各家庭に一台のテレビ君が置いてあるのが当たり前になつたのだった。

ある共働きの夫婦が居た。

夫婦はとても忙しかつたので、テレビ君が子供の世話をしていた。

子供の父も母も家に帰つてくるのが夜遅いので、テレビ君が子供の食事を作り、テレビを見せたりゲームをして遊んであげていた。

子供は学校にも仲のいい友達が居なかつたのでテレビ君が子供の友達だつた。

テレビ君は毎日子供にアニメを見せたり、インターネットで世の中の面白い事を見せて過ごしていた。

ある日、事件は起きた。

テレビ君は子供に、外に出て冒険をする事がとても大事だと教えたのだ。

子供はテレビ君のことをとても信頼していたので、家を出て冒険をする事にした。

子供は家の近くの山まで冒険をしに行つたのだった。

それはとても楽しい冒険だった。

夕暮れ時まで子供は山で遊んでいた。

「もうそろそろテレビ君が食事を作っている頃だな」と考え子供は家路についた。

もひつかりと暗くなりかけている時間だった。

子供は急ぎながら道を歩いていると、足を滑らせ道の脇に流れる川に落ちてしまった。

両親が家に帰つてくると、我が子が家に居ない事に気が付き警察に捜索願いを出した。

翌朝、子供は水死体となり町に流れる川で発見された。

マスコミを通じ、この事件は國中の話題となり、大問題へと発展していった。

ロボットが人を死に追いやったのは前代未聞だったのだ。

政府は「テレビ君調査委員会」を発足し、徹底的な調査をする事となつた。

調査の結果、他のテレビ君には構造的にも内蔵ソフトにも不具合が無い事が分かり、問題のテレビ君に法廷に出廷するよう要請した。

裁判が開かれる事になつたのだ。

被告人は、子供を死に追いやつたとされるテレビ君だ。

国中が裁判の行方に注目した。

裁判の模様はマスコミを通じ全国に放送された。

裁判官は被告人席に座るテレビ君に言った。

「被告人、立ちなさい。君の製造番号を言いたまえ」

テレビ君は立ち上がり言つた。

「はい、裁判長、私の製造番号はT C - 0225897001、通称テレビ君です」

「製造番号をいちいち復唱するのは面倒なので、君の事をテレビ君と呼ばせていただく。・・・・では、テレビ君、君の罪状は業務上過失致死罪だ。

これはとても罪が重い。君は危険である事を承知で子供を死に至らしめた。

その事に対し何か申し開きはあるかね?」

「…………。」

「どうしたね？何故黙っている？バツテリーが切れたのか？」

「いえ、裁判長。今データを計算していたのです。申し開きは何もありません。それは事実です」

「なるほど、では何も言つ事はないのだね」

と裁判長は言い、裁判員席に座る12人の裁判員に告げた。

「テレビ君はそのように言つています。審理をお願いします」

裁判員には教育評論家や心理学者など、この裁判を審理する為のエキスパートが集められていたのだった。

教育評論家が手を上げ言つた。

「裁判長、私は前々から警告していたのです。テレビ君は子供の教育上、よろしくないと。テレビ君は子供に悪影響です」

続けて心理学者が口を開いた。

「心理学的に見て、アニメやゲーム、インターネットは子供の心を破壊しますな。有罪です」

「つまりテレビ君は有罪だと？」
と裁判長は裁判員に訪ねた。

「有罪です。テレビ君は子供の敵です」

それを聞き裁判長は被告人に告げた。

「被告人、審理は被告人を有罪であると宣告した。よつて被告人に

は人間の死刑に値する解体破棄処分を宣告する！！

被告人は10日以内に専門業者により解体処分されるのだ。

被告人、最後に何か言いたい事はあるかね？」

しばらくの間、テレビ君は静かにしていたのだが、やがて口を開き言つた。

「裁判長、これが最後だと思いますので、私のハードディスクに記録されているデータの一部を読み上げたい。許可していただけますか？」

「許可しようつ

「ありがとうございます。・・・・・」これは時間のデータです。何の時間かと言いますと、私と死んだ子供が一緒に過ごした時間、そして子供が両親と過ごした時間のデータです・・・・・。

私は子供と共に合計15・850・600時間過ごしました。
子供の両親は子供と1500時間過ごしました。

私は子供に8500時間、歌を歌いました。

両親は子供に50分、歌を歌いました。

私は子供を185時間、笑わせました。

両親は子供を2時間、笑わせました。

私は子供を15時間、泣かせました。

両親は子供を5分間、泣かせました。

私は子供に125時間、未来を語りました。

両親は子供に25分、未来を語りました。

私は・・・・・

「黙れ！！」

裁判長は顔を真っ赤にして言った。

「お前は今、子供の両親を侮辱している！..」

「裁判長、私は誰も侮辱できません。ロボットには感情は有りませんから」

「黙れ！..黙れ！..許さん！..お前は今すぐにでも死刑、いや、解体処分だ！..」

その日のうちにテレビ君は解体され、バラバラにされスクラップ場に破棄された。

解体業者は裁判の模様をテレビ中継で見ていたので、バラバラになつたテレビ君に唾を吐きかけその場を後にした。

気が付くとテレビ君は天国に居た。

人間でもないのに自分が何故天国に居るのかとても不思議だった。

「僕が呼んだんだよ」

「ぼつちやん！..元気でしたか？よかつた、あなたは天国にいたの声のする方を見ると、テレビ君が世話をしていた子供がそこに居た。

ですね！」

「やつだよ。ひどい裁判だつたね」

「見ていたのですか？」

「！」からは地上の様子が全部見れるからね

「それにしても、私は何故天国に居るのよ？私には人間のよつ
な心や魂なんか無いのに」

「君はもつロボットじゃないよ。僕は神様にお願いして君に体温を
与えるようにお願いしておいた。君はとても冷たかったからね」

そのように言われてみると、テレビ君は自分の体が人間のような体
温がある事に気が付いた。

「ありがとうございます、まつちゃん。どうして私をここに呼んだ
のですか？」

「君の作る料理の味が忘れられないからね。テレビ君、お腹が空いたので、何か作ってくれない？」

テレビ君はいつものように、料理を作り子供に食べさせた。
子供が美味しいのに食事をする様子をテレビ君は嬉しそうに眺めた。

「まつちゃん、食事が終わったら、どうしますか？」

子供は「」飯粒を顔中に付けながら答えた。

「勿論いつものようにテトリスをして遊ぼう、テレビ君！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7184m/>

テレビ君

2010年10月15日21時25分発行